

し1年3ヶ月にわたり自宅療養を続けることができた。これは訪問看護婦による適切な情報がスタッフ間で共有され、時間差を開けずに活用されたことが効果的であったと思われる。

15) 糖尿病患者における食後高脂血症の治療の意義 (第2報)

—Friedewald の式は食後でも成り立つか—

中村 宏志・中村 隆志(中村 医院
内科)

【はじめに】我々は昨年、糖尿病患者の食後高脂血症(高TG血症)の治療が大血管障害の進展の抑制に有用であることから、食後脂質測定は有意義であると報告した。

【目的】空腹時に用いられる LDL 推定のための Friedewald の式 ($LDL=TC-HDL-TG \times 0.2$) が食後でも成り立つかどうかを検証した。

【対象と方法】当院に通院中の糖尿病患者 160 名(うち高脂血症83名)を対象に、空腹時および食後2時間に TC, HDL, TG, LDL を測定した。

【結果】空腹時では、Friedewald の式による LDL 推定値と LDL 直接測定値はほぼ一致 ($r=0.970$) し、食後2時間では、「Friedewald の式で求めた $LDL+10$ 」が LDL 直接測定値とほぼ同じ ($r=0.956$) であった。

【結論】食後採血で LDL を推定するためには、換算式を $LDL=TC-HDL-TG \times 0.2 + 10$ とするのが妥当である。

16) インスリン治療糖尿病患者への外来生活指導のための血糖自己測定に関するアンケート調査

稲岡 綾子・岩原由美子
渡辺 栄吉・梶井由美子(信楽園病院
栄養係)
佐藤美代子(同
同)
三留五百枝・佐藤由美子(外来看護婦)
山田 幸男・高澤 哲也(同 内科)

当院の栄養・看護外来では外来受診の糖尿病患者全員に栄養士・看護婦が同席して生活指導を行っている。SMBG 実施患者へは SMBG 記録に基づいて指導を行うが、QOL の向上により役立つ指導を行うために、現

状把握及び今後の可能性を探る目的でアンケート調査を実施した。

調査の結果、現状では医師から指示された通りの SMBG 回数やインスリン投与量の調節は十分に行われているといえた。しかし、QOL の向上への活用は十分にされているとはいえなかった。

栄養・看護外来では患者と情報を共有し合い、柔軟性のある指導を継続して行えるという長所がある。この長所を活かすことで、SMBG が血糖コントロールはもちろん患者の QOL の向上にも役立つものとなる可能性は大きい。そのためにスタッフ一同努力していきたいと思う。

17) 血糖自己測定を考える

八幡 和明・他(長岡中央病院内科・
検査科・看護科)

血糖自己測定がはたして有効に应用されているのかを検討するために患者アンケートを実施した。測定回数、タイミング、結果の記録やそれによる対応の変化、有用度、正確度、費用の理解、今後の継続希望などについて調査した。この調査で患者の理解や応用の仕方については十分でなく、今後個々の指導を高めていくことが必要であると痛感した。また各種血糖自己測定器を様々な条件下で検定を行なった。条件さえ守ればどの機種もほぼ正確であった。しかし温度条件、採血量など遵守すべきである。採血針の針先の培養では24時間放置した針でも無菌状態であった。しかし指先は結構汚染されていて、石鹸やウエットティッシュでは消毒は十分でなかった。アルコール消毒したものだけが無菌状態が維持された。やはり消毒は必要と結論された。

18) 後期高齢者へのインスリン自己注射導入

成田 操・松本 博美
倉井 佳子・高橋 純子(新潟市民病院
小林 七栄(看護部)
田村 紀子・田中 直史(同
百都 健(第二内科))

【目的】高齢者のインスリン治療は老年期の特徴により導入を躊躇するケースが多い。当院の導入状況について調査した。[方法と対象] 1995年4月～1999年10月に入院した75才以上で血糖管理を主目的とし、日常生活動作が自立した患者62名のうち、インスリン自己注射を新規導入された患者15名を対象とした。これを習得困難

群(A群)5名と普通群(B群)10名にわけ、入院時の記録から年齢、身体条件、家族背景を比較検討し、指導方法の工夫、精神的特徴を調査した。【結果】年齢、家族背景は両群間に差はなかった。脳血管疾患の既往のある患者と後ろ向きな心理状態の患者がA群に多かった。自己注射が習得できるまでに行った指導の実際には早い時期からNsがついて自己注射を開始、チェックリストの活用、できたところを褒めて励まし、反復練習、手順の簡略化などを行った。【結論】後期高齢者のインスリン自己注射は、習得可能である。

II. 特別講演

「糖尿病患者における低血糖症とその対策」

兵庫医科大学第二内科 助教授

難波光義先生

第46回新潟大腸肛門病研究会

日時 平成12年12月9日(土)

15:30~18:00

会場 新潟グランドホテル

1) 虚血性小腸狭窄の一例

齋藤 義之・轟木 秀一
浅海 信也・山口 和也(燕労災病院)
宮下 薫 (外科)

症例は63歳の男性。2000年7月下旬より腹痛・下痢を訴えていた。9月4日腹痛で当院内科を受診、腹部単純X線検査で腸閉塞症の診断となり入院、経管小腸造影、下部消化管内視鏡検査で終末回腸に3cmの狭窄を認めた。保存的治療で軽快しないことから当科を紹介され転科、手術となった。開腹所見では回盲弁の15cm口側に3cmの狭窄が認められ、回腸部分切除術を施行した。肉眼所見では腸管壁の肥厚を伴った管状狭窄と全周性の潰瘍を認めた。病理所見では炎症性肉芽組織と粘膜下層を中心とした線維化が認められた。以上より虚血性小腸炎と診断した。虚血性小腸炎は希な疾患で、本邦では40数例の報告があるのみである。今回我々は、回腸部分切除術を施行し良好に経過した虚血性小腸炎による

小腸狭窄の一例を経験したので報告する。

2) 小腸 lipomatosis の一例

高久 秀哉・横山 直行(新潟大学)
須田 武保・畠山 勝義(第一外科)
加納 恒久・味岡 洋一(同)
渡辺 英伸(第一病理)

症例は、36才女性。1996年5月、他院にて、小腸の軸捻転による腸閉塞と診断され、開腹による整復術を施行されている。その際、回腸の lipomatosis (多発性脂肪腫)を指摘された。1998年6月、腹痛、嘔吐を訴え当科を受診。腹部超音波検査、CTにて小腸軸捻転と診断され、緊急手術施行。Treitz 靱帯から425cmの回腸より140cmに渡り lipomatosis が存在していた。同部を中心として反時計まわりに2回転半、小腸が捻転していた。小腸軸捻転を整復し、lipomatosis 部分を中心にして159cmの小腸を切除した。病理学的には、粘膜下層と漿膜下層に多数の脂肪腫を、また、それらの間に多数の憩室を認めた。

3) 成人腸重積症の一例

桑原 明史・村山 裕一
林 達彦・池田 義之(厚生連村上総合病院)
清水 春夫 (外科)

【はじめに】成人腸重積症は比較的古まな疾患で、特異な臨床症状や理学所見に乏しく、診断が困難な症例がある。また、器質的疾患の合併を80%以上に認めるといわれている。

【症例】23歳男性。5ヶ月前から右側腹部痛を繰り返してきた。今回、嘔吐後の右側腹部痛を主訴に来院。来院時の腹部CTで上行結腸に腫瘍性病変を認めた。後日施行した大腸内視鏡で上行結腸に病変認めず、腹部CT上も前回指摘された腫瘍性病変が消失していたことから上行結腸腸重積と診断。盲腸の虫垂開口部に腸重積の誘因となったと考えられる粘膜下腫瘍様の隆起性病変を認め、手術後の病理組織で虫垂粘液囊腺腫と診断された。

【結語】経時的な腹部CT所見の変化から診断し得た成人型腸重積症の一例を経験した。先進部の誘因となる背景に腫瘍性病変があり、この可能性を考慮した検査と治療が重要であると考えられた。